

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	アリストテレスの『動物運動論』に関する文献調査と哲学研究
氏名 Name	山田 雄介
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	文学研究科・思想文化学専攻・博士後期課程二年
渡航国 Country	ドイツ・テュービンゲン
渡航日程 Travel schedule	2025年 10月 5日 ~ 2026年 2月 10日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本研究は以下の目標の下に行われた。第一に、テュービンゲン大学哲学部の Klaus Corcilus 教授の研究指導の下、アリストテレスの『動物運動論』に関する研究を進める。第二に、日本で閲覧・入手困難な『動物運動論』の一次・二次資料の調査、収集を行う。第三に、海外の研究者と交流を行い、将来の研究活動に繋げる。

成果 Outcome

(1) 研究発表と研究指導

滞在期間中に『動物運動論』に関して**二度の学会発表**を行った。

2026年1月16日に、主としてハイデルベルク大学・テュービンゲン大学・フランクフルト大学の古代哲学を研究する博士学生が発表を行う Südwestgruppe Workshop において“Digression or Not?: Heavenly Motion in Aristotle’s *De Motu Animalium*”という題目で発表を行った。『動物運動論』第3・4章は天体運動について議論しているが、それが動物運動に関する議論とどのように関係するかについて先行研究の理解は一致していない。本発表は、天体運動の考察が、第6章における動物運動のいわゆる「不動の動者」の考察に理論的に貢献しているという Coope-Morison 仮説(2020)の前提条件を批判的に検討し、その仮説とは別の仕方での著作の統一的な読解方法を提案した。質疑応答では、Corcilus 教授から解釈の基本的な方向について同意をいただき、さらに議論を強化しうる幾つかの有力な論点を指摘していただいた。また、他の教授や学生からも発表に対して重要な質問や肯定的な評価を得た。

2026年2月5日に、テュービンゲン大学で毎週木曜日に開かれる古代哲学セミナーの Oberseminar ([Oberseminar WS 25 26 Plan](#)) において、“The Practical Syllogism in Aristotle’s *De Motu Animalium*”と題して発表を行った。本発表は2025年に出版済みの自身の論文を基にしたものである。『動物運動論』第7章で論じられるいわゆる実践的推論について、従来の研究に見られる「欲求-認識」の枠組みを用いた解釈の長所と短所を指摘し、それに代わる解釈の可能性を検討した。本発表は、Corcilus 教授の論文(2008)を踏まえつつ複数の点で異なる見解をとったが、発表後の質疑応答では新たな解釈の可能性を積極的に認めていただいた。また、発表はテキスト密着型の分析に重きを置いていたため、次のステップとして、テキストからいったん距離を置いた上で理論の全体像ならびにアリストテレス自然哲学説との関連をより明確にするようにという課題を Corcilus 教授からいただき、帰国後にもメールで議論を続けて

いる。

以上の両発表において、多くの博士学生、ポスドク研究員、訪問研究員からも質問をいただき、また、会後のディナーでは研究への強い関心と今後の学術的交流への積極的な姿勢が示された。議論を交わした全員の名前を挙げることはしないが、ここでは特に、発表とは別に原稿を読んで詳細なコメントをくださった Klaus Corcilius 教授とチュービンゲン大学に訪問滞在中の Fernando Martins Mendonça 教授への感謝を記したい。

(2) 日本で入手困難な資料の調査・収集

滞在中に『動物運動論』の重要な写本および日本で入手困難な二次文献を調査、収集した。2026年1月2日に、『動物運動論』のギリシア語テキスト校訂版(Primavesi 2023)において極めて重要な写本である B^e (*BEROLINENSIS PHILLIPPICUS* 1507)を調査した。B^e写本は、他の写本にない幾つかの重要なテキストを保持しており、最新校訂版の編者 Oliver Primavesi 教授が仮定する二つの写本系統 (α , β) のうち β 系を再構成する上で重要な位置を与えられている。校訂版の読みの根拠を確認するためにベルリン州立図書館を訪れ、当該写本を実際に読むことで新校訂版の Apparatus Criticus を検証し、さらにそこには記載されていないが考慮に値する事柄を知ることができた。また Bertram Lesser 氏には現物の調査に先だって当該写本の電子化とその電子資料の共有をしていただき、事前に確認すべき箇所を絞り込むことができた。

さらに、チュービンゲン大学に所蔵の、日本で入手困難な多数のドイツ語・イタリア語資料を複写することができた。特にイタリア語資料に関しては、日本に所蔵のない新旧の研究書を複写することができた。また、大学図書館を通じて、多数の論文や研究書の電子資料をダウンロードすることができた。

(3) *De Anima* 読書会への参加

毎週火曜日と木曜日に行われる『魂について』(*De Anima*) 読書会に参加した。この読書会は、EUからの援助を受けた [TIDA | Text and Idea of Aristotle's Science of Living Things](#) プロジェクトの一環であり、参加した冬学期は、第三巻第四章～第七章を、各章の担当者による発表と質疑応答・ディスカッションという形式で読み進めた。近年、Corcilius, Falcon, Roreitner による当該諸章に関する研究書(2025)が発刊されたが、読書会ではその最新の研究を参考にしつつもそれに縛られることなく多角的な視点からテキストの解釈が議論された。特に新たな学びとして、アラビア語注解、ギリシア語写本を専門とするポスドク研究員らが参加しており、彼らから文献学的な知識を学ぶ機会を得た。

(4) 多数の講演会への参加

TIDA プロジェクトの一環として毎週木曜日に世界各地の研究者を招いて行われる Tübingen Oberseminar New Research in Ancient Philosophy (Oberseminar)、また、その他のワークショップや講演会に参加した。参加した会は多数になるため各会の詳細は省略するが([TIDA Events | Universität Tübingen](#) を参照)、毎回研究者とディスカッションする機会があり、自身の研究を深めるよい機会となった。なかでも、2025年10月2,3日開催の“Conceptions of Aristotle's Psychological Hylomorphism: Psychophysicalism, Impurism, and the Causal Role of the Soul”は自身の研究に深く関連するワークショップであり、ワークショップ中には第一線のアリストテレス研究者である David Charles 教授と『動物運動論』のテキストについて直接議論する機会を得た。また、『動物運動論』新校訂版の編者である Oliver Primavesi 教授の講演を聴く二度の機会に恵まれた(2025年12月17日、2026年2月4日)。「動物運動論」は各講演の題目ではなかったものの、会後の雑談中に、新校訂版で何度か言及されている『動物運動論』に関する今後のプロジェクトについて伺うことができた。

(5) 多くの研究者との交流

研究滞在中には、読書会や各ワークショップ・講演会に参加していた博士学生やポスドク研究員と交流することができた。現在、チュービンゲン大学にはアリストテレスを研究する学生や研究員が TIDA プロジェクトの下に多数集まっており、読書会やワークショップ中だけでなくその後にもコーヒースタンドやディナーで彼らと議論に没頭し、アリストテレス解釈の新たな視点や学びを得た。また、将来の訪問研究や共同研究について積極的な姿勢が示された。

今後の展望 Prospects for the future

今後の展望として、第一に、滞在中に行った二度の発表とそのフィードバック、また新たに入手した文献資料を踏まえて博士論文の執筆を進める予定である。第二に、今回の発表に対して数人から英語論文の出版を勧められたことから、海外学術雑誌への応募を計画している。第三に、博士課程卒業後の進路として海外での滞在を視野に入れて準備を進めたい。Corcilus 教授には、その候補としてチュービンゲン大学以外にも複数の滞在先候補を挙げていただき、私が非 EU 圏の学生であることを考慮した助言をいただいた。第四に、滞在中に議論を交わし親交を深めた多くの博士学生や研究者との共同研究や訪問研究に繋がりたいと考えている。